

再発見・牛久第三十一話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

熊沢蕃山と牛久②

思想家(陽明学)熊沢蕃山

と牛久藩藩主山口家

―蕃山の生家―

野尻家は代々牛久藩重臣―

蕃山の名言と経世思想

―藩主池田光政の岡山藩に出仕―

熊沢蕃山は、名を伯繼、通称二郎八、後に助右衛門といった。蕃山は、江戸幕府徳川第二代將軍秀忠治世下の元和5年(1619年)に京都稻荷(京都市伏見区)近くで、浪人野尻藤兵衛一利、母熊沢亀女の長男として生まれた。少年時代は水戸・徳川家に仕えていた外祖父熊沢半右衛門守久の許で養育され、後にその養子になる。16歳で、京都所司代板倉重宗の推輓により備前国(現岡山県)の岡山藩主池田光政に仕えた(小姓役)。20歳の時致仕。その後近江国高島郡小川村(現滋賀県高島市)の近江聖人と呼ばれていた陽明学者・中江藤樹の門を叩き一旦は断わられ

たが母のとりなしで入門。藤樹の聲咳に接することができたのはわずか8カ月足らずではあったが、そこには『出会い』と呼ぶにふさわしい師弟の交流があった。

蕃山は、陽明学を修めてのち、27歳の時に、光政に請われて備前に帰り、重職番頭(大名家によつては城代番頭)に登用され知行3千石を食み経世済民に手腕を發揮した。明暦3年(1657年)、自ら禄を辞して、知行地の寺口村(現備前市蕃山)に隠棲した。寺口村を新古今和歌集の一首によまれている『葉山蕃山』の蕃山にちなんで、蕃山村と改め、苗字も蕃山とし、蕃山了介といつて寛文元年(1661年)に京都に行くまでここに隠棲していた。

蕃山が残している名言の中から一点を次に紹介しておく。『備前神道、仏道、みな明知の人の其時処位に応じて行ひし跡なり。道の真にはあらず(集義外書より)』。これは、儒教、神道、仏教は、みな知の明らかな人が、その時その所その位に応じて行なつた跡にすぎないのであつて、真理そのもの

ではない、という意味だ。

蕃山の経世思想の基礎になつている渡来学問の儒学(儒教)、朱子学、陽明学の概要を次に記述しておく。

儒学の始祖は、中国周時代の人孔子(紀元前550〜479年)で、その言行が弟子たちによつて論語として遺された。西暦350〜400年の間に百濟(朝鮮の南西部にあつた国)王が博士王仁を遣わし、第15代応神天皇に論語10巻などを貢進して、王仁は同天皇の帝王学の師にもなつた。これ以降日本では儒学を帝王学とし、また経世に用いられた。第33代推古天皇の摂政聖徳太子は儒教・仏典(百濟王から第29代欽明天皇に貢進された)の影響を受けて『冠位十二階』、『憲法十七条』を制定した。

朱子学は、中国南宋時代の人・朱熹(1130〜1200年)が諸学者の学説を受けついで大成した儒教の教学で、日本には鎌倉時代に伝えられた。

陽明学も儒学の一派である。中国明時代の人・王陽明(王守仁)(1472〜1528年)が唱えた主観主義的実践的儒教哲学で、形式化した朱子学に反発して根心を重んじた。日本に伝えられ江戸時代

初期の中江藤樹は、陽明学の開祖となつた。

蕃山の実父野尻一利

が牛久藩主山口家に仕官

―養父熊沢守久は

水戸・徳川家に仕官―

蕃山の実父野尻藤兵衛一利は、寛永6年(1629年)以降に、牛久藩初代藩主山口重政に召し抱えられた。野尻家は代々、山口家に重臣として仕え、明治4年(1871年)の廃藩(このとき重時は100石を食む)に至っている。

養父の熊沢半右衛門守久は、水戸・徳川家初代頼房に召し抱えられた。



説明文は、備前市指定史跡熊沢蕃山宅跡(提供・備前市教育委員会)